

# 観能のいざない

舞囃子

敦盛

(あつもり)

舞囃子は、能の一部を紋付袴姿で演じる形式。

熊谷直実(くまがいなおぎね)は、一ノ谷の合戦で、まだ十六歳だった平敦盛を手にかけて心に心を痛め、出家して蓮生(れんしょう)と名乗っていた。敦盛供養のため一ノ谷を訪れると、蓮生の前に敦盛の霊が現れ、平家の没落、直実との戦鬪と最期のさまを語り、再現して見せる。(舞囃子ではシテの舞に主眼がおかれ、蓮生は登場しない)

狂言

鐘の音

(かねのね)

主人は、成人した息子に金で飾った太刀を与えようと思い、太郎冠者に鎌倉に行って金の値を聞いてくるように命じる。太郎冠者は「鐘の音」と勘違いし、寺々の鐘の音を聞いて回り、主人に報告する。主人の様子を見て自分の勘違いに気付いた太郎冠者は、即興で舞を舞ってお茶を濁そうとするが主人に叱られて終わる。

間抜けな太郎冠者、寺々の鐘の音を擬音語で聞かせるところが見所。

能

葛城

(かづらき)

出羽の国羽黒山の山伏が登場し、修行のため、今から葛城山へ入るところであると名乗る。葛城山を踏み進む山伏たちだが、あまりの大雪に、木陰で少し休もうと思っていると、一人の女性が現れて声をかける。よかったら今夜は私の庵でお休みなさいという女の言葉に、山伏はありがたく思い、泊めてもらうことにする。庵に着くと、女は背負っていたしもとを解いて火を焚いて山伏たちを暖め、「しもと」というのは、葛城山で拾い集めた細い枝で、大和舞の古い歌にも「しもと結ぶ葛城山に降る雪の間なく時なく思ほゆるかな」と詠まれているものであると語って聞かせる。山伏が、衣も乾いたので夜の勤めを始めようとすると、女は、法力による咎めを受け、蔦葛(つたかづら)で身を縛られ、三熱の苦しみを受けていると告白し、助けてほしいと頼む。三熱の苦しみは神が受けるものであると山伏が不審に思っていると、昔岩橋をかけなかったせいであると言って姿を消す。

山伏が、あたりに住む男に尋ねると、男は、昔、役行者(えんのぎょうじゃ)と

葛城の神で、修行者の為に、葛城山と吉野山の間に岩橋をかけることになったが、葛城の神が、顔を見られることを恥じて夜にしか仕事をしなかったので、怒った役行者は葛城の神を法力により蔦葛で縛り上げたという話を語る。

合点のいった山伏が夜もすがら祈禱していると、葛城の女神が現れ、山伏の前で大和舞を舞って見せ、やがて夜が明け始めると、その姿を見られることを恥じてまた岩戸へと入っていった。

葛城山は、天岩戸（あまのいわと）があった場所と考えられており、岩戸に入った天照大神に出てきてもらおうと天鈿女（あまのうずめ）が舞ったのが大和舞と伝えられていた。役行者は修験道の祖で、神や鬼をも従える法力を持っていた。雪をかぶった笠に柴（しもと）を背負った前シテの姿も美しく、月が照らす白銀の世界で葛城の神が舞う冬の人氣曲。

（宝生流職分 佐野玄宜）